白糠のアイヌ語地名

第２回

○パシクル（馬主来）

「パシクル」は、アイヌ語で「カラス」を意味し、釧路市音別町との境界にあるパシクル沼やこの沼に流れ込むパシクル川、また、馬主来町内会の名称として使われています。

アイヌ語辞典では「パシクル」は「カラス」とのみ記されていますが、貫塩喜蔵エカシは、地名の由来として、アイヌ語の分析と伝説をもとに、原型は「パ（見つける）・シリ（陸地）・クル（影）」で、それがつまって「パシクル」になったと説いています。

◆地名にまつわる伝説など

①パシクル沼の伝説

昔、西の方から、一人の青年が小舟にカキの稚貝を積んで、どこか繁殖させる所がないかとやってきた。

釧路市音別町側からパシクル沼を望む

そのとき、一面にガス（霧）がかかり、一寸先も見えなくなってしまったが、カラスの鳴き声に導かれて舟を寄せていくと、やがて陸の影を見つけることができた。

青年は、思わず「パ・シリ・クル！」と叫んだ。

青年が陸へ上がってみると、そこには沼があり、たくさんのカラスが目に入った。

（貫塩喜蔵エカシの話）

また、パシクルには、もう一つカラスが重要な役割を果たした伝説があります。

国の重要無形民俗文化財となっているアイヌ古式舞踊の「フンペリムセ（鯨の踊り）」発祥の物語です。

②フンペリムセ発祥の由来

アイヌウタリは、太古から天の恵みによって食べ生きぬいてきた。

時として、天と自然の恵みが少ないときもあった。

あるとき、西方でカラスの鳴き声が激しいので行くと、パシクルトウ（沼）の浜辺に大きなフンペ（鯨）が波に寄せられていた。

シラヌカコタンのウタリは、このクジラを天恵の食料として感謝していただいた。その場で即興的にリムセ（踊り）が舞われた。

それが今に伝承されている。

（発祥の地碑文より）

■パシクル沼のカキ貝

「パシクル沼」の伝説にも出てきたように、パシクル沼とカキ貝には深い関係があります。今でも沼の岸にカキの貝殻が積み重なっている場所があるとおり、大昔のパシクル沼はカキ貝の一大生息地でした。

平成23年8月、茨城大学などの研究機関によって行われた調査では、分厚く積み重なったカキ層が明らかになりました。

このカキ層は、約6千年前の縄文時代前期につくられたもので、当時は、気温と水温が今よりも高く、それにともなって海水面も上昇（縄文海進と呼ばれている）したことから、暖流系のカキ貝が北海道沿岸に北上し生息したと考えられています。

鯨をかたどった『フンペリムセ発祥の地碑』